AI防犯開発進む

ダイワ通信、不審者を検知

ダイワ通信（金沢市）が、人工知能（AI）を搭載した防犯システムの開発を進めている。防犯カメラの映像をAIで解析し、人のしぐさや行動から不審者を検知する仕組み。AIの防犯システムは万引対策や雑踏警備での利用実績が全国で増えており、同社は検知の精度を高め、商業施設などでの導入を狙う。30日に金沢市大豆田本町で開かれる北國花火金沢大会（北國新聞社主催）の警備で活用される。

ダイワ通信が手掛ける防犯システムの画面。挙動不審な人物を検知した場合は赤い枠で囲まれる（同社提供）

北國花火金沢大会で活用

ダイワ通信の防犯システムはAIを通じて、一つの場所に長時間とどまり、周囲を頻繁に見回したりする挙動不審な行動を検知する。該当した人物は、映像を確認するモニター上で赤い枠線で示され、監視者のスマートフォンに通知が届く。

AIは数万通りの人の動きを学習しており、それを基に不審とみられる動きを判断している。同社は、行動パターンをさらに学習させるなどして検知精度を高めている。

北國花火金沢大会では、主要な交差点などに防犯カメラを設置し、本部テントのモニターに映像を飛ばす。モニターは警備担当者らが確認し、不審な動きを検知した際には、必要に応じて状況を確認する。顔認証と温度検知機能を備えた同社の「フェイスフォー」も各所に設置する。

全国で実証実験

AIと防犯カメラを連動させたシステムは、全国で実証実験や導入が進んでいる。

東急セキュリティ（東京）は7月1日から、東急電鉄渋谷駅で、客のトラブルや急病人などを発見する警備システムの実験を始めた。石川県外では、商業施設や小売店舗での万引防止対策、陸上競技場の警備に導入された事例がある。

ダイワ通信グループでは25年度をめどに、監視カメラやドローン（小型無人機）などを駆使した「AI防犯」の研究拠点を金沢市五郎島町に整備する。

同社の担当者は「25年の大阪・関西万博を前に、AI防犯に対する需要は高まっており、さまざまな方面に自社のシステムを提案したい」と話した。